九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

アダス・スミス利子論、利附貸付資本論の基本的特質

高木，暢哉

https://doi.org/10.15017/4151158

出版情報：經濟學研究. 7 (2), pp.201-227, 1937-08-10. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：

アダム・スミス利子論、利附貸付資本論の基本的特質

高木暢哉

序言

利子の問題は、同時に、利子の取得を自己の徴標的屬性とする利附貸付資本の問題である。而してこの寄生的一資本の問題は、又當然に、その生存の地盤となる基礎的經濟關係の問題に迄遡りうる。然るにこの基礎的經濟關係は近代經濟社會においては資本であるから、利附貸付資本の理論は、ひいては利子の理論は、かゝる資本の理論によつて究極的に基礎づけられねばならない。乃至はこれを逆に、資本の理論からして、それらの內面的聯關を辿つて、必然性をもつて、推論されねばならない。從つて、いかなる資本の理論に發足して、いかなる論理の必然をもつて推論されてゐるかといふ事が、よつて立つ利附貸付資本の理論の、ひいては利子の理論の當否を決定する主たる契機ともなるであらう。いまこの

見地に立つていふならば、重商主義的利子論の一面觀は、それが商業資本との關聯において理解されたといふことによるであらうし、又重農主義的利子論の偏狹性は、それが農業資本の體系内で究極的な基礎づけをうけた、といふ點に求められるであらう。然るにこゝで問題とせんとするスミス利子論は、商業資本を自己の派生的資本となし、農業資本を自己の中に包容する産業資本の理論體系に於いて把握されてゐるものと考へられる。即ち利附貸付資本は産業資本に從屬するものとして、利子はかゝる利附貸付資本の利子として、取扱はれてゐるものと思はれる。然もその視野は單に個別的資本の見地に止まるものではなく、社會的資本の見地に迄擴大されて。從つてスミスの利子論は、一には産業資本の利子論として開陳された點に、二には、それが社會的見地からも考察されたといふ點に、その全面性、その發展性を見出しうるであらう。こゝに重商主義的利子論とも重農主義的利子論とも區別されるスミス利子論の基本的特質があると考へられる。以下この二點を中心として、その然る所以を考察して見たい。而して第一の點は本稿の第一節において、第二の點は第二節において省みられるであらう。

（一）

アダム・スミスの國富論第二篇「資本の性質、蓄積、投下」は、「資本の蓄積」に關する論述から始められてゐる。而して蓄積された資本が、貸付資本として使用される場合の攻究が、第四章「利附貸付資

本について（Of Stock lent at Interest）」の課題であることは、彼も亦のべる所である。[1] 從つてこの章での問題が、資本投下の一形式としての一資本――利附貸付資本にあることは論をまたない。（チュルゴーの問題の提出の仕方が正にさうであつた）。[2]（註一）そこでスミスはこの章を、一つの資本としての利附貸付資本の確認から始めるのである。即ち第四章の冒頭において彼は次の如くのべる。「利附にて貸付けられる資財（stock）は貸主には常に一つの資本（capital）と考へられる。貸主は期限がくればこの資本の回收されるといふ事、そしてその間借主はこの資本の使用に對する一定の年々の賃料（rent）を彼に支拂ふといふ事を期待する」[3]（註二）と（傍點筆者）。こゝでいふ賃料（註三）とは勿論利子をさすのである。從つて利附貸付資本とは、利子を自己增殖の形式とする貸主に關する一資本である、といふのである。そして、かやうな、利附貸付資本の一般的規定が正にスミス利附貸付資本論の出發點ともなつてゐる。

（註一）スミスの資本觀がフイジオクラート的であることを指摘する人にレヴインスキーがゐる。彼は特にスミスとチュルゴーとの關係を重視する。[5] 尙、リストも同樣に考へる。尤もスミスが直接チュルゴーの「省察」によつたとは考へてゐないが。[5] 尙、Leon Say, Turgot, p. 33. 參照。

（註二）資財（stock）と資本（capital）との區別はスミスに於いては明確でない。多少區別がなされてゐると考へられるのは、第二編、特に第一章である。そこでは資財は、チュルゴー的に、動產（richesses mobiliaires）と考へられ、資本は「所得又は利潤を生む」[6]ものと考へられてゐる。この點については、レヴインスキー、キャナン[7]の研究が參照さるべきである。[8]

1) Smith, The Wealth of Nations, ed. E. Cannan, Vol. I. p. 260.
2) Turgot, Réflexions sur la Formation et la Distribution de Richesses, §. 70. 71.
3) Smith, ibid., Vol. I. p. 332. 譯文は竹內氏譯に負ふ所大である、然し筆者において勝手に改めた點も少くない。
4) Lewinski, The Founders of Political Economy, 1922, pp. 42—43, 83—84.
5) Gide and Rist, A History of Economic Doctrines, p. 55. p.4. note.
6) Smith, ibid., Vol. I. p, 261.
7) Lewinski, ibid., pp. 78—79. 83—84.
8) E. Cannan, Theories of Production and Distribution, 1924, p. 56.

（註三）スミスが利子を賃料（rent）と規定したのは、單に從來の慣用語を踏襲したにすぎないと考へる。即ち利子が土地賃料（地代）より類比的に說明されたのは、可成以前からの事である。例へば、ペッティは、利子を貨幣の賃料として、地代を土地の賃料として、等しく賃料の體系においてとらへてゐる。[9] 而してこの兩者の類比を最大級に開陳したのはロックであると考へる。[10]

スミスは、かやうな一資本としての利附貸付資本の確認から出發し、ついで、それのヨリ特殊的な、ヨリ內容的な規定を試みて行く。ところで、貨幣が貨幣を生むといふ空幻な一資本――利附貸付資本――に內容を附與するものとしては先づ、貸付取引に時間的繼起的に接續する一過程、即ち借主が借りうけ返濟に至る迄の過程が考へられるであらう。スミスも亦この一過程に目を向け、この點に着目することによつて利附貸付資本のより立入つた分析を試みてゐる。即ち彼は先づ利附貸付取引を借主の需要の性質に從つて二つの部類に區分するのである。曰く「借主はそれ（借うけた資財――筆者）を資本（capital）としてか、或は直接的消費（immediate consumption）の爲にとつておかれる資材としてか、いづれに用ゐてもよい」[11]と。スミスはこゝで貸付取引なる現象を資本信用と消費信用との二つに分けてゐるのである。

然し、スミスはかく貸付取引を二部類に區別しながらも後者、即ち消費信用の方は、深く問題としない。それは彼が「利附にて貸付けられる資財は、疑もなくこれら兩方に使用されるけれど、然し後者よ

9) Petty, A Treatise of Taxes and Contributions, 1662. p. 24. The Economic Writings of Sir Willium Petty. ed. by Hull, 1889, Vol. I, p. 42.
10) John Locke, Some Considerations of the Consequences of the Lowering of Interest and Raising the Value of Money, 1691, The Works of John Locke, 3 ed. Vol. II, pp. 18—19.
11) Smith, ibid., Vol. I, p. 332.

りも大いに屢々前者に使用される」[12]と考へるからである。そしてスミスはその理由として次の如くのべてゐる。消費せんが爲に借入れ、又貸付けることは、兩當事者の利益に反するから、人は自己の利益を顧慮することによつて、かやうな取引を慎しむであらうし、[13]又事實についても「借主の間にあつてすらも、儉約・勤勉家の數は、浪費・怠惰者の數に著しく超えてゐる」[14]といふのである。

かやうにしてスミスは、利附貸付取引に二つの形式の別を認め乍らも、支配的なのは資本信用であるとする。そしてこの資本信用のみを、利附貸付資本の問題の、主たる考察の對象とするのである。尤も、その理由とする所には問題があらうが、然しこのスミスの態度は極めて正當であると考へられる。何故なら、この資本信用が近代的利附貸付取引の支配的な基本的な形式であることは疑ふ餘地がないからである。（これに反して消費信用は、嘗つて支配的であつた高利貸付取引の本質をなすものである）。それにしてもヨリ近代的な資本信用と、ヨリ前期的な消費信用とのこの二形式が、いかにこれ迄混亂的に論じられて來たことであらう。いかに對象の二元的設定が、近代的利附貸付資本の本質の一義的解明を妨げてきたことであらう。遠くは重商主義的利子論爭、近くは重農主義的利子論においてさうである。彼等は或は浪費的地主の消費信用を問題とし、或は貿易業者の資本信用を問題とする。（註四）彼等はこの信用の二形式の間を右往左往して、何等利附貸付資本の一義的解明に到達することが出來なかつた。而してかゝる動搖的二心的態度に決定的な袂別をつげたのがアダム・スミスである。スミスによつて、利子の理論は

12) Smith. ibid., Vol. I, p. 332.
13) Smith, ibid., Vol. I, p. 332.
14) Smith, ibid., Vol. I, p. 333.

專ら資本信用に關するものとして、利附貸付資本は、近代的な利附貸付資本として初めて取上げられることになつたのである。尤も時代もスミスの爲に充分な成熟をとげてゐたのではあらうが。

（註四）かゝる對象二元論の混亂的所說は、ヒュームにおいて最も露な矛盾を呈してゐる。彼は利子率を左右する事情として三つあげる。[15]第一は借入れの需要であつて、彼はこれを浪費的地主のそれであるととく。[16]第二はこの需要に應ずべき富で、これは商業によつて蓄積されると考へる。第三の事情は商業の利潤である。即ちヒュームはこの第三において、利子は商人の獲保する利潤より支拂はれ、その限り利子率は利潤の率によつて決定されると考へてゐるのである。然るに第一では地主をもつて利子を支拂ふ借主の代表者とする。それでは一體、地主の支拂ふ利子率はいかにして商人の利潤によつて左右されねばならぬのか。ステュアートはこの二元的な對象に二元的な解答を與へる。而も妥協的に。即ち彼は「利潤を獲る目的で借る人々の階級」と「浪費する爲に借入れる」[17]階級とを區別し、浪費的な資金需要が「利子率に少なからず作用することを指摘する」[18]けれども何利子は結局は「貿易や產業の利潤に相應した利子率」[19]に落着かざるを得ないと主張する。

然し、以上スミスがのべた限りでは、單に論究の對象が定められたといふにすぎない。即ち利子論で對象とすべき貸付取引は、資本信用である、といふにすぎぬ。そこで我々は、かく決定された對象が、スミスによつていかに規定され、いかに理解されてゐるか、次に問題としなければならぬ。換言すれば「借主によつて資本として用ゐられる」といふ事の意味を究明しなければならない。而してこの點の究明こそ、スミス利子論の意義特質を明確にする所以であると考へる。何故なら、こゝにスミス利子論の究極的基礎づけを見出しうると考へるから。別言すれば、利附貸付資本にとつてヨリ基礎的な資本の問

15) Hume's Essays, The Universal Library, p. 216.
16) ibid., pp. 216--217
17) Steuart, An Inquiry into the Principles of Political Economy, (1767) Basil, 1796, Vol. IV, p. 22.
18) Steuart, ibid., Vol. IV, p. 26.
19) Steuart, ibid., Vol. IV, p. 18.

題が、こゝで露呈されてゐると考へられるからである。そこでスミスが「借主によつて資本として用ゐられる」といふこの資本を、いかなるものと解するか、檢討すべきであるが、然しその前に、スミスの見解の發展的特質をヨリ明確にする爲に、一應彼以前の諸家の見解をうかがつて見ることとする。先づ重商主義的な見解から。

さて、單に借主が資本として借りうけ、資本として用ゐるといふだけの認識ならば必ずしもスミスにまつものではない。それは古く遡つて、すでに重商主義的利子論爭に見出しうる。例へばバーボンは次の如くのべてゐる。「利子は利子を支拂つて借りうけた貨幣が、貨幣で支拂はれねばならぬから普通貨幣に對して計算される。然しこれは誤りてある。なぜなら利子は、資本（stock）に對して支拂はれるからである。蓋し、借りうけた貨幣は商品購買の爲に、乃至は商品購買に先立つてそれらの爲に前拂ひされる爲に、投ぜられるからである。貨幣を利子附で借り、それを彼の手許にねかしておいて、その利子を損するものはないからである」[20]と。かのダツドレー・ノースも亦次の如くいふ。「さて耕作すべき土地を有する人より、土地を耕作すべき人が多いやうに、又運用すべき資本（stock）を必要とする多くの人がゐるだらう。そして又一國が富裕になるに從ひ資本を貿易に於いて運用する能を有しないか、乃至はその勞をいとふ多くの人の手に、貿易の爲の資本が存することとなるであらう。然し乍ら土地所有者が彼の土地を賃貸する樣に、又此等資本所有者は彼等の資本を賃貸する。後者は利子であり、而も資

20) Nicholas Barbon, A Discourse of Trade, 1690, Hollander's Reprint, 1905, p. 20.

本に對する賃料にすぎない」[21]と。又、この外に我々はマッシイをあげることが出來る。即ち彼は、借主は貸付けられた貨幣を用ひて一定の利潤を取得しうるが故に、その中より利子を支拂はねばならぬと考へてゐる。この際彼がこの貸付取引の對象を資本と見てゐることは明白である。然も、單に個別的な利潤をあげる資本ではなくて、平均利潤を生むといふ資本として。[22]

かやうにバーボンにせよ、ノースにせよ、マッシイにせよ、いづれも既に貸付取引の對象が資本であるといふ事を認めてゐる。そして資本――利潤――利子の一聯の關係を看破してゐる。にも拘はらず我々は、スミスの所論に比して尙著しい逕庭を發見せざるを得ない。即ち後に明にするやうに、スミスのいふ資本は產業資本であるに反し、彼等のいふ資本は尙商業資本であり、彼等のいふ利潤は商業利潤であり、從つて利子はその利子であるからである。

例へば、バーボンは、利潤は商人の利潤であり、利子は利得と損失とを計る規矩であるとのべてゐる。[23]又貿易の考察から利子の理論をとき起したノースが資本をいふ時には當然にかゝる商業資本を指すものと考へねばならぬ。又ロックが、借主を交易（Traffick）を行ふ人と見る時にも、[24]マッシイが利潤を貿易（Trade）の利潤と見る時にも、利子はかゝる商業利潤より支拂はれるものと見るものである。のみならずマッシイは「貿易の利潤は一般に貿易業者の數の、貿易の量に對する比例に依つて支配される」[25]とのべてゐる。この際マッシイが、讓渡利潤として流通過程に留保される一定量の商業利潤（貿易

21) Sir Dudley North, Discourses upon Trade, Hollander's Reprint, p. 17.
22) Joseph Massie, An Essay on the Governing Causes of the Natural Rate of Interest, 1750, Hollander's Reprint, pp. 45—46.
23) Barbon, A Discourse of Trade, ibid., p. 20,
24) Locke, Some Considerations, ibid., pp. 18—19.
25) Massie, An Essay, ibid., p. 52.

の量によつて定まる）をめぐつて競爭する個々の商人の（この競爭は貿易業者の數が決定する）獲得する利潤の高さを問題としてゐる事は明かな事實である。又ステユアートが、利潤を「賣渡に基づく利潤（profit upon alienation）」[26]として說明する時には、利潤を流通過程において獲得されるものと考へてゐるものである。そして彼の說明する所は、未だ論理においては稚拙であるが、總じて、讓渡利潤として流通過程に獲保される商業利潤の本質をとくものである。

かやうにして以上の諸家はいづれも、資本としては商業資本を、利潤としては商業利潤を問題とし、利子もそれらに關する利子として說明するものである。從つて彼等は、かく考へる限り近代的利附資本の本質を明確にすることはできないのである。即ち商業資本は、近代資本家社會に於ける資本の基本的形式たる產業資本から見れば、唯單にその流通過程に從屬する派生的二次的資本にすぎないからである。利附貸付資本を單に商業資本との聯關に於いてのみ考察することは、その本質を見る所以ではない。寧ろそれは產業資本との聯關において先づ考察し、次いで產業資本の一亞種としての商業資本を問題とすべきである。こゝにスミスによつて克服さるべき第一の課題が殘されてゐるわけである。

それでは、重商主義的諸說は別として、重農主義者達はいかに考へるか？ その一人としてのチユルゴーの說く所をきけばかうである。即ちチユルゴーはスミスと同樣に動產の蓄積からとき起す。そして彼はこの蓄積された動產が資本として投下される五方法を案じ、その一つとしての利附貸付資本を問題と

26) Steuart, ibid., Vol. I, pp. 290. 294—295.

する。かく彼が利附貸付資本を、資本投下の體系内で問題とする限りでは[27]、彼は利附貸付資本の全面的理解に一歩近づくかに見える。加ふるに彼は、資本の前貸と回收との經驗的循環運動——これを貨幣の流通（circulation de l'argent）[28]といふのであるが——の認識をもつて、資本家的生産の基礎構造に迄到達する。そして、剰餘としての純生産物、純所得の概念を教へてくれる。然しチュルゴーはこの幸先よき船出において忽にして難破してしまふ。即ち剰餘は農業資本の生産する所であり、自然の賜物であり、所得形式としては地代であると考へるからである。彼は利附資本に對立する資本として商工農の諸資本を見ながらも、尙利子を土地資本の利子（地代）から導かんとするのである。[29]ベームが彼の利子論を結實説（Fruktifikationstheorie）と名附けてゐるのは故あることといはねばならぬ。[30]

かやうな重農主義的偏見は、農業資本のみ生産的と考へる誤謬を打破し、農業資本も工業資本も共に生産的となし、合せて産業資本として確立することなくしては克服され得ない。こゝにスミスによつて解決さるべき第二の課題が殘されてゐるのである。そこで我々は、スミスがいかに叙上の一面的見解を正して、利附貸付資本を産業資本の基礎の上に打立てえたか、見ることとしよう。

スミスは借主によつて「資本」として利用されるといふ事の意味を次の如く考へてゐる。「若し借主が此を資本として用ゐるならば、彼はこれを生産的勞働者の維持に用ゐるわけであつて、此等生産的勞働者はその資本の價値を利潤を添えて再生産する」[31]と。即ち貸付資本は借主により生産的勞働者を維持する資

27) Turgot, Réflexions, § 82. Répons à objection なる節を除いてゐる Gustave Schelle 版による、
28) Turgot, Réflexions, § 68.
29) Turgot, Réflexions, § 85.
30) Böhm-Bawerk, Kapital und Kapitalzins, Abt. I, 4 Aufl. 1921, S. 55.
31) Smith, ibid., Vol. I, p. 332.

本に轉化せしめられるといふのである。それではこの生産的勞働者とは何であるか？（註五）この生産的勞働の概念については、スミスには大體二つの觀念がある。第一は特定の目的物に具體化される勞働と考へる見解である。[32] 然しこの觀念は、今資本を問題とし、資本によつて維持される生産的勞働者の意義を考究する場合には直接關係はない。そこで第二の見解を見ることにする。即ちかうである。生産的勞働者とは、「勞働の用ひられる主體の價値を增す」ものであり、「彼の働きかける原料の價値に、彼自身の生活維持資料の價値と彼の雇主の利潤の價値とを附加へる」[33] ものである。即ち資本によつて雇傭され、價値を生産する計りでなく、利潤をも資本家に取得せしめるものを生産的勞働者であるといつてゐるのである。從つてスミスは、「一切の資本は生産的勞働者のみの維持にあてられる」[34] とのべてゐるが、逆に資本によつて維持される一切の勞働は生産的勞働であるといつてもよいであらう。生産的勞働は資本によつて維持される。反對に、資本によつて維持される勞働が生産的勞働である。そしてこの相關的な二概念によつて示されるところが、生産手段の所有者と、生産手段より切離された近代的賃勞働者との、特定の歷史的社會關係を指示するものであることは確である。スミスが次の如くのべる時には、明に右の如き社會關係を念頭におくものといはねばならぬ。曰く「資本が特定の人の手に蓄積されるや否や、彼等の中のあるものは當然にこれを投じて勤勉なる人々に（industrious people）仕事をさせるであらう。彼等は勤勉なる人々に原料並びに生計の資を供給し、彼等（勞働者—筆者）の勞働所産を販賣す

32) Smith, ibid., Vol. I, pp. 313–314.
33) Smith, ibid., Vol. I, p. 313.
34) Smith, ibid., Vol. I, p. 340.

るなり、或は彼等の勞働が原料の價値に附加したものによるなりして利潤を得んとするであらう」[35]と。資本家より生計の資を得る代りにその勞働を提供し、價値を原料に附加することによつて資本家に利潤を得しめる勤勉なる人々。そして、原料その他の生産手段を所有し、生計の資を勞働者に供してその勞働を買取り、彼等の勞働が原料に附加する價値の中より利潤を取得する資本家。この二種の經濟人の間の社會關係が、「生産的勞働者を維持する所の資本」の社會關係である。（註六）從つてこゝでは、特定の生産部面に投下されてゐる特定の資本が問題となつてゐるのでなく、資本が資本家的に經營されうる一切の生産部門に亘るといふ意味においての、産業資本が問題とされてゐるのである。從つて、こゝでの資本は、重商主義的見解に支配的であつた樣な商業資本ではない。又、重農主義的見解において、唯一つ生産的と考へられた樣な農業資本でもない。といつても、重農主義者が不生産的として遺棄してきた工業資本を排斥するものでもない。農業資本も、商業資本も、工業資本も、合せて生産的とする所の資本一般こそ、「生産的勞働を維持する資本」である。スミスは生産的勞働を維持するといふ資本に四種の資本があるとのべてゐる。一つは、原生産物の獲得に、二は、その製造加工に、三は卸賣商業に、四は小賣商業に投ぜられるものである。[36]即ち一つは農業資本として、二は工業資本として、三、四は商業資本として、かくして農工商合せて生産的と彼は見てゐる。勿論、この場合商業資本を農業資本及び工業資本と並列せしめるのは正當ではない。蓋し商業資本は流通過程に於いてのみ機能する副次的な資本であ

35) Smith, ibid., Vol. I, p. 50.
36) Smith, ibid., Vol. I, pp. 340—342.

るのだから。然しそれにも拘はらずスミスが特定の生産部門や、特定の領域にのみ機能する特殊資本ではなしに、これら資本を自己の特殊として限定する一般としての資本、即ち産業資本の概念に迄想到してゐる事は確かである。而してこの綜合的な資本概念の上に立つてのみ、農業資本及び工業資本は産業資本の二形式として、商業資本は、産業資本の流通過程で機能する副次的一資本として分析されうるであらう。かくてスミスが重商主義的見解よりも、重農主義的見解よりも、より包括的な、ヨリ徹底的な理論體系を打立て得たといふことは容易に理解しうる事である。スミスはかゝる稔り豊かな資本の理論の上に立つて、彼の利附貸付資本の理論や、利子の理論を展開してゐるのである。

（註五）スミスの生産的勞働については、より立入つた嚴密な研究をなすべきであるが、こゝではそれをさけて、唯資本概念を確めるに必要な限りの考察をなした。尙次の諸著參看。Gide and Rist, ibid., pp. 62—63, Cannan, ibid., pp. 22—24, Lewinski, ibid., pp. 85—37.

尙この勞働がいかにスミスの體系において重要な位置を占めてゐるかについて、コッサは次の如くのべる。「スミスの體系は勞働と産業の概念から出發するから、貨幣より出發するる重商主義や、唯土地の生産性のみの上に立つ重農主義に對立して、産業の體系（Industrie System）と呼ばれた」[37]と。

（註六）スミスの利潤論の解釋について異說が多い。私はこゝでは、利潤を勞働者の附加した價値の一控除と解しておいた。この點、次の諸著參照。Pierstorff, Die Lehre von Unternehmergewinn. 1875, S. 2—12,

37) Cossa, Einleitung in das Studium der Wirtschaftslehre, 1880, S. 164.

Platter, Der Kapitalgewinn bei Adam Smith, Conrad Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik, Bd. 25. S. 313—322, Böhm, ibid., S, 61—35.

以上において、借主によつて「資本として投下され、生産的勞働者の維持に用ひれれる」といふ事の意味が、産業資本として投下されるといふ事であることを知つた。それでは、貸主に關する一資本である利附貸附資本は、この借主によつて充用される産業資本といかなる關係に立つか？　この兩者の關係を媒介するものは、いふ迄もなく借主の提供し、貸主の收受する利子である。それでは利子はスミズによつていかに說明せられるか？　彼は次の如く語つてゐる。「資本を運營又は投下する者のこれにより收める所の所得は利潤と稱せられる。これをみづから投下せずして他人に貸附けるものがこれより收める所の所得は、貨幣の利子は又は利息（the interest or the use of money）と稱せられる。それは借主が貸主に、借主が貨幣を用ゐて儲ける機會をもつ利潤に對して支拂ふ報償（compensation）である。この利潤の中一部は危險を冒して、且つこれが投下の勞をとる借主に當然歸屬し、一部は借主に對してこの利潤を儲ける機會を與へる貸主に歸屬する」[38]と。（傍點筆者）こゝでいふ資本の運營者はいふ迄もなく産業資本家である。そして彼が取得する利潤は、勿論重商主義的な賣渡利潤とも、重農主義的な純生産物とも區別された産業資本の利潤である。而して利子は、借主たる産業資本家が産業利潤を取得しうる事に對する報償であると考へられてゐる。それは取得した利潤の中より支拂はれる。從つて利子は

38) Smith, ibid., Vol. I, p. 54.

利潤の一分割分である。[39] そして利潤をもつて本源的な所得（original revenue）と考へるスミスにとつては「貨幣の利子は常に一つの派生的所得（derivative revenue）である」[41] 従つてこの派生的所得を自己の所得形式とする利附貸附資本も、利潤なる本源的所得を取得する産業資本からしてみれば、一つの派生的資本といひうるであらう。即ち利附貸付資本は産業資本に轉化することによつてのみ、そして産業利潤の中から利子を取得する事によつてのみ、自ら資本たりうる寄生的一資本である。スミスは利附資本及び利子を右の如く解するものと理解すべきであらう。かくして、利子の理論も利附資本の理論も、共に産業資本の理論の上に打立てられてゐるものと考へられる。即ち我々は、こゝにスミス利子論、利附貸付資本論の重商主義的見解とも重農主義的見解とも區別される基本的特質を見出しうるのである。（註七）

（註七）貸主は資本の單なる所有者である。これに反して借主は資本の單なる使用者である。（尙この點後述）スミスは、この所有と使用との關係に着目して、利附貸付資本を他の諸資本と區別してゐる。即ちいふ。「この貸付資本（moneied interest）は農業資本（landed interest）と異るのみならず、商工業資本（trading and manufacturing interest）とも異る。蓋し、これ等後者にあつては、資本の所有者自らが自己の資本を使用するからである」[42]と。

（二）

貸主に關する一資本たる利附貸付資本は借主によつて資本として借りうけられ、生産的勞働者の維持

39) Smith, ibid., Vol. II, p. 331.
40) Smith, ibid., Vol. I, p. 54.
41) Smith, ibid., Vol. I, p. 54.
42) Smith, ibid., Vol. I, p. 333.

に用ひられる。從つて、利附貸付資本は、これが借主によつて轉化せしめられる所の産業資本との關聯から一つの規定が與へられうる。以上のべてきた所はすべてかゝる見地から試みられた規定であつた。從つてそこでの視野は、貸付けられ、投ぜられ、利潤をあげ、利子を支拂ふといつた、個別的資本循環の縱の視野である。そこでは利附貸付資本は産業資本と時間的繼起關係において相接するにすぎない、それ故にかゝる見地は尙一面的なるを免れない。我々は更に、かゝる個別的利附貸付資本と個別的産業資本との連繫が、いかなる全體的關聯の中で成立してゐるか、考察すべきである。即ち個別資本の循環を可能ならしめる社會的資本をも、我々の視野に取入れるべきである、といふのはかうである。

貸付けられた貨幣は勿論退藏されるわけではない。それは借主によつて所要の財の購買に投ぜられる然もこの所要の財は貸主と借主との關係の外部において購買されねばならない。即ち社會的流通過程の內において、購買されねばならぬ。又借主は返濟に先立つて彼の所産を販賣して資本を回收しなければならないが、これも同樣社會的流通過程において遂行される。然もこの資本投下と資本回收との二流通過程の間には生産過程が介在する。この個別的生産過程も亦、社會的生産過程中の一過程としてのみ存立しうるのである。かくして貸付資本——産業資本の繼起的循環關係は、かゝる社會的資本の生産、流通過程の內にあつてのみ可能たるにすぎないであらう。從つて我々は、利附貸付資本をかゝる社會的資本との關聯においても、亦考察すべきである。

而して今我々が問題としてゐるアダム・スミスも亦、かゝる社會的視點に身をうつし、この視角からして利附貸付取引を考察してゐる。即ち彼は彼の所謂年生產物の流通過程に目をうつし、かゝる一國資本の流通過程を介して、利附貸付取引がいかにして遂行されてゐるか考究してゐるのである。そこで續いてスミスの所說をうかがふべきであるが、彼も亦、借主が所要の財を購買する過程の考察から、論を起してゐるから先づそれから見てゆくこととする。即ち彼は次の如くに考へを進めてゐる。

凡ての利附貸付取引は、貨幣で行はれるが、借主が眞實欲するものは貨幣でなくて財である。若し借主が借りうけた貨幣を資本として投下せんとする場合には、この貨幣をもつて必要な工具、原料及び生活資料を購買するであらう。然るに此等所要の財は年生產物の中から購買される。從つて「この貸付金によつて貸主は、いはば、その國の土地及び勞働の年々の生產物の一定部分に對する彼の權利を借主に讓渡し、借主をして隨意に行使せしめるわけである」[1]と。スミスは、かやうにして、貸付取引は一應は貨幣の貸借ではあるけれど、然しその眞實は、これによつて年生產物に對する權利が移轉せしめられるものである、と考へるのである。

ところで、貸付取引によつて、かく年生產物に對する權利が移轉せしめられるのは、いふ迄もなく、貨幣自體がかゝる權利の所持者であるからである。即ち貨幣が年生產物に對する權利の當體であればこそその所持者たる貸主が年生產物に對して權利を得、その使用者たる借主が年生產物を利用することが出

1) Smith, ibid., Vol. I, p. 333.

來るのである。かゝる權利の當體としての貨幣の意義を、スミスは別の個所で次の如く表現してゐる。

「一ギニーの金貨は、恰も附近のすべての商人宛振出されたる、一定量の必要品並びに便利品に對する一つの手形と見なされうるであらう」[2]と。（傍點筆者）それはいふ迄もなく貨幣の交換媒介機能に着目した指圖證券的な見解である。又スミスは、貨幣を財貨の「讓渡證書(deeds of assignment)」[3]とも稱して居るが、この場合も同樣、貨幣が財貨の單なる讓渡手段であるといふ意味で、かくいふのである。（註一）從つて、財の讓渡證書としての貨幣が貸付けられ、借りうけられる事が、とりもなほさず、年生產物に對する權利の讓渡となることは、まことに當然の事といはねばならぬ。スミスも亦次の如くのべてゐる。

「然しこの貸付資本（moneied interest）においてすらも、貨幣はいはば所有者が自身で使用する氣のない資本を、一方より他方に移轉せしめる讓渡證書にすぎない」[4]と。（傍點筆者）（こゝでいふ資本が、財としての資本である事は前後より察して明白である）（註二）

貨幣は貸付取引においても財の單なる讓渡手段にしかすぎない。貸付取引によつて究極的に移轉せしめられるものは貨幣ではなくて、貨幣の購買しうる資本財である。否、更に進んで、貸付取引の眞實の意義は、貨幣の貸借ではなくて、貨幣によつて購買される年生產物の貸借であるといふ風に、スミスは考へてゐるのである。かくしてスミスは、これより貸付取引は、貨幣の所有者と使用者との貸借關係といふよりは、寧ろ資本財の所有者と使用者との貸借關係であるといふ風に論を進めて行くのである。

2) Smith, ibid., Vol, I, p. 274.
3) Smith, ibid., Vol, I, pp. 334. 336.
4) Smith, ibid., Vol, I, pp. 333—334.

いかにスミスが、貸付取引の對象を現物的に考へてゐるかは、後に更に明らかになる事であるが、かく貨幣に關する貸借關係である貸付取引を、財に關する貸借關係に解消せしめる態度は、正しいとはいひ得ない。とはいふものの、全く意義なしと葬りさる事も亦できない。なぜかといへば、從來の所說が——特側に重金的な——利附貸付資本を專ら貨幣の側面においてのみ考察し、その現物的基礎である財への反省を餘りにも怠つてきたからである。從つてスミスが貸付取引を、年生產物の所有者と使用者との貸借關係といふ風に、財に關する貸付取引として考へた事は、却つて貸付取引の物財的基礎を明確にする所以であると考へられる。いひうべくんば、寧ろスミスの功績でなくてはならぬ。尙、スミスのかゝる見解が、いかに重農的見解と關はり合ふものかといふ點については今はのべないでおく。

（註一）スミスとても貨幣の交換手段機能のみを見るものではない。例へば、價値尺度機能の如きも明に認めてゐる。[5] 然し財の流通が問題とされる限り、交換媒介機能のみが前面にもち出されて居る。而してかゝる貨幣觀がスミスによつて貨幣のみを唯一の富とした重金思想駁擊の爲のいかに有力な武器として用ひられたかは想像に難くないであらう。[6]

（註二）こゝでスミスは、貸附取引の直接の對象となる貨幣資本と、それによつて間接的に購買移轉せしめられる財としての資本とを混亂的に取扱つてゐる。從つて兩者の區別及び相關は何等明にされてゐない。尤もキヤナンは、スミスは「貨幣額」としての資本と「財貨」としての資本の二概念の間を動搖してゐるといふ風に批評してゐるが、[7] 寧ろ右の如く、二者の區別、相關の理解に暗かつたと評する方が適當であらう。

5) Smith, ibid., Vol. I, p. 34. Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms, ed. by Cannan, 1896, pp, 182—184.
6) Cf. Price, A Short History of Political Economy in England, p. 27. Gide and Rist, ibid., pp. 83—84, Lewinski, ibid., pp. 17. 42.
7) Cannan, ibid , pp. 59—60.

かやうにしてスミスは利附貸付取引の實體を年生産物の貸主より借主への讓渡と解する。そこで、我々は、かゝる年生産物に關する貸付取引がいかやうに行はれるものであるか省るべきであるが、然しその際、我々は直ちに次の如き疑問に逢着するであらう。即ちこの讓渡さるべき年生産物は、消費信用をとはぬとすれば、勿論資本財であるが（スミスの先の引用文の趣旨もさうであつた）、それでは此等年生産物はいかにして資本財として年生産物中に與へられてゐるのか。そこで我々は年生産物の構成に關するスミスの所見を一應理解しておく必要がある。然もこの年生産物について、資本たりうる部分と消費されうる部分とを確めねばならない。然るにこの年生産物は一國資本の所産であるから、從つてかくすることは、とりもなはさず、一國資本の再生産の不可缺の一過程としての社會的流通過程を考察することとなるであらう。さてスミスは次の如くに考へる。「各國の土地と勞働との年生産物は、……自然二つの部分に分たれる。その中一つの、屢々その最も大なる部分は、先づ第一に資本を代置する爲に即ち資本から既に取去られた食料品、原料及び完成品を更新する爲にあてられる。その中他の部分は、或はこの資本の所有者に彼の資本の利潤として、或は他の人に彼の土地の地代として、所得を供するにあてられる」第一の部分は資本を代置する部分として「唯生産的勞働者のみの扶持に直接用ゐられる」第二の部分は、「直接的消費にあてられうる」部分であつて、利潤、地代として所得を構成し、「生産的勞働でも、不生産的勞働でも差別なく扶持してうる」[8]のであると。（註三）而してもし充用される生産的勞働者が

8) Smith, ibid , Vol. I, p. 315.

第一の部分のみによつて維持されるならば、前期と同規模の生産が、もしそれ以上に第二部分が生産的勞働者の充用に用ゐられるならば蓄積が行はれる。[9] 而して「資本は節儉（parsimony）により增加され」[10] るとスミスは考へてゐる。

（註三）年生産物中に、機械原料等の價値補塡部分の存在を認めるや否やについては、スミスは必ずしも一貫してゐない。或はこれを否定し、[11] 或はこれを肯定する。[12] これはスミスの再生産論の一大缺陷であるのみならず、問題がこの點に關する限り、彼の利附貸付資本理論の一制限ともなつてゐる。

年生産物の流通に關してはスミスは以上の如く考へる。そこでかかるスミスの再生産論を頭におきながら、スミスの次の言葉を吟味してみよう。そこでは、年生産物に關する考察に合せて利附貸付取引が論じられてゐる。曰く、「かやうにして利附にて貸付けられる資本は、年々の生産物中の或著大なる部分を貸主から借主へと讓渡するものとして考へられる。——尤も借主はその代りこの貸付の經續中は、年々の生産物中のヨリ少なる部分を（所謂利子なのであるが）年々貸主に讓渡し、この貸付の終るに際しては、最初借主に讓渡されたと同じだけの著大なる部分を（所謂返濟なのであるが）借主に讓渡するといふ條件で」[13] 我々は前述の年生産物の內容横成に關するスミスの見解と、今右の引用文に示される貸付取引に關する見解とを照合することによつて次の如き結論に到達することが出來ると思ふ。即ち貸付は年生産物中、資本として留保される部分（資本代置部分と蓄積部分）より貸付けられる。利子は年生産物

9) Smith, ibid., Vol. I, p. 56.
10) Smith, ibid, Vol. I, p. 320. Cf. Gid and Rist, ibid, p. 73.
11) Smith, ibid, Vol. I, pp. 52. 54. 269.
1) Smith, ibid., Vol. I, pp. 270—271.
13) Smith, ibid., Vol. I, p. 334.

中、消費元本となるべきものの中、利潤部分より支拂はれる。そして返濟は資本の代置部分より支拂はれると。而してかく解することこそ、スミスの眞意を汲む所以であると考へる。

さてかやうにしてスミスは、年生産物流通過程の考察にあはせて、利附貸付取引の性質を明にしてゐる。かくして利附貸付取引は、それが遂行される場所である社會的流通過程（これは個々の貸付取引成立の爲の不可缺の基礎的前提であるが）の面からも、亦一つの規定をうけたわけである。然し乍ら、我々はかく見來る事そのことによつて、やがてこの視點をも止揚せざるをえなくなる。即ち個別的な利附貸付資本を、社會的流通過程において基礎づけるといふこれ迄の見地は廢棄されて、社會的利附貸付資本を社會的流通過程において考察するといふ見地に到りうると考へる。なぜなら、貸付取引が資本の所有者がこれを自ら使用せずして、人をして使用せしめる經濟關係であるとするならば、然もこの資本は年生産物中資本たりうる部分から貸與されるものとするならば、所有者によつて使用されないかゝる資本を總計して「一國における利附貸付資本の總量」なる概念に到達しうるには、唯の一歩をも要しないからである。而していふ所の「一國における利附貸付資本」とは、いふ迄もなく、一國の規模において普遍化された社會的利附貸付資本である。それは個々の利附貸付資本を横の關係において包攝する。そしてこの個々の貸付資本は、この一國の利附貸付資本の中にあつて各々の循環をとげる。個別的利附資本が包攝され、個別的利附資本を包攝するこの普遍的な利附貸付資本は、正に社會的利附貸付資本である。然

もこの社會的利附資本は、一國の總生産的資本中、所有者によつて使用されずして、貸付けられて利子を取得する資本部分として規定される。いひうべくんば、この一國における利附貸付資本は、一國總生産的資本（産業資本）中の一部についての所有と使用とに關する一派生的資本といふ事が出來よう。實にスミスは、利附貸付資本の問題に對してかやうな一つの社會的視野を切り開いてゐるのである。然もスミスをまつて初めて切開かれた待望の視野を、即ちスミスはかやうな一國利附貸付資本の分量を規定して次の如くのべてゐる。「それ故に、どこでも或一國にて利附にて貸付けられうる資本——普通の言慣しに從へば——貨幣の分量は、その國において行はれる諸貸付の用具として役立つ貨幣——紙幣であらうと鑄造貨幣であらうと——の價値により左右されずして、その國の年々の生産物中、或は土地より、或は生産的勞働者の手中より出で來るや否や、單に資本の代置に充當されるのみでなく、又その所有者が自ら使用するの勞をとる氣のない資本の回復に充當されるやうな部分の價値により、左右される」と。[14]（傍點筆者）利附貸付資本の量は、第一に一國年生産物中資本として代置さるべき部分により、第二に、その資本中所有者が他人をして使用せしめるやうな資本部分により決定されるといふのである。そして、年生産物の單なる流通手段たる貨幣の量によつて定まるのではないといふのである。これは正にスミス年生産物流通論や貸付取引實體論や、年生産物構成論の不可避的結論ではないか。

14) Smith, ibid., Vol. I, p. 333.

かやうな見地からして一國における利附貸付資本の蓄積を推論することは極めて容易である。即ち利附貸付資本は、第一には資本一般の增加により、第二は資本中所有者の自ら使用せざるが如き部分の增大により、蓄積されうるであらう。この第一の點についてスミスは次の如くのべてゐる。「いかなる國においても年生產物中、……資本の代置に充當される部分が增大するに比例して、所謂貸付資本なるものも、當然これと共に增大する。その所有者自らこれを投下するの勞をとらずして、所得をおさめんと欲するかゝる特殊的資本の增大は、當然、資本の一般的增加に伴ふものである。即ち換言すれば、利附にて貸付けらるべき資本の量は、資本そのものの增大と共に、漸次に大となつて行くのである」[15]と。

而してかやうな資本一般の增大は、先にも見た如く節儉によつて果される。從つて利附貸付資本の增大も、亦節儉に依存することであらう。即ちスミスは次の如く言ふ。「人は彼の所得から節約するところのものをすべて、彼の資本に加へ、それを自身更に多數の生產的勞働者の維持に用ゐるか、乃至はそれを利子即ち利潤の分前を得んが爲に誰か他の人に貸付け、彼をしてさうさせるかいづれかする」[16]と

（傍點筆者）

利附貸付資本の理論を產業資本の基礎の上に打立て、更にこれを社會的見地に迄展開したスミスは、一國利附資本の形成・蓄積をとく事以上の如くである。從つて、彼の所論の特色が、第一にはそれが產業資本の理解の基礎に打立てられてゐるといふ點に、第二には、社會的再生產の見地からも說明され

15) Smith, ibid., Vol. I, pp. 334—335.
16) Smith, ibid., Vol. I, p. 320.

てゐるといふ點に、ある事はいふ迄もない。この二點こそ、スミスの所說を從來のそれと決定的に區別する所以である。いまスミスの所說の發展的特質をヨリ明確にする爲に、從來の貸付資本形成・蓄積論を瞥見して見るならば、次の如くである。

利附貸付資本の蓄積に關する所說として、先づあげらるべきは、これを資財（stock）乃至は動產（richesses mobiliaires）の蓄積として解する見解である。いふ所の「資財」乃至「動產」とは「消費以上の生產超過高の一切の結果」[17]と規定してよいであらう、而してノースやチュルゴーの見解が一應はこの中に加へられるであらう。然し自體多義的なこの動產なる概念については、當然何が主體的であるかといふ事が疑問となる。これに對してノースもチュルゴーも[18]、[19]金屬乃至は貨幣が主體的であると考へてゐる。そこで、この動產の貨幣的側面に着目して、貸付資本の蓄積を貨幣の蓄積とする論者が生じて來る。かゝる論者の一人として先づペッテイがあげられるであらう。彼は貸付資本の蓄積を貨幣の蓄積と考へる。そして利子率の低下は貨幣蓄積の結果であるといふ。即ち「利子の自然的低下は貨幣增加の結果である」[20]と彼はのべてゐる。同樣の見解はロックにも見出すことが出來るし、[21]ロックの貨幣流通觀を利附貸付資本の理論において發展せしめたステュアートにおいても亦同樣である。

然し利附貸付資本の蓄積を貨幣の蓄積と見る見解は、貸付取引が單なる貨幣の取引ではなくて、資本の取引であると觀ぜられるに至つて破碎される。即ちこの新しき立場からすれば、利附貸付資本の蓄積

17) Marshall, Principles of Economics, 8 ed. 1922. p. 787.
18) North, Discourses upon Trade, ibid., pp. 16—17.
19) Turgot, ibid., § 49. 50.
20) Petty, Political Arithmetick, 1690, p. 99. The Economic Writings of Sir Willium Petty, ed. by Hull, 1899, Vol. I, p. 304.
21) Locke, Some Considerations, ibid., p. 6.

は、資本の蓄積として考へられねばならないから。例へば、ペッテイやロックの立場に向つて痛烈な駁撃を加へたマッシイや[22]ヒュームの[23]立場がさうである。然し乍ら彼等の考へる資本は尙貿易に投ぜられる商業資本である。從つて貸付資本の蓄積はかゝる商業資本の蓄積より說明されねばならない。即ちヒュームは次の如くのべて居る。「貸付資本を著大ならしめる職業は、換言すれば、勤勉を增加し併せて節儉を增加せしめることによりこの勤勉の大なる支配力を社會の成員に與へうる職業は、商業を除いては他にない」[24]と。

かやうに商業資本の立場から資本の蓄積を論ずる諸家に對して、農業資本の立場から論ずる一群の論者がある。いふ迄もなく重農主義者である。その一人としてのチュルゴーの意見をきけばかうである。動產は自然の純粹の賜物である年收入（年生產物）中、消費されずして貯藏される部分より成立する。それは最初は家具、家屋等の形式をとつて、後に貨幣の形式をとつて蓄積される。[25] かくいふ限りチュルゴーは、農業生產を基礎とする動產の蓄積を、而してその發展した形式として貨幣の蓄積を問題とするものである。然し、彼がかくして蓄積された貨幣が、資本として投ぜられる五つの方法を案するときには、正にこの貨幣を貨幣資本として取上げるものである。彼は進んで農工商の資本の前貸及び回收を論ずる。然も彼は農業こそ商工に對してより本來的、より基底的なものと考へる。かく考へる限り、彼の動產の蓄積は——それは貨幣資本の蓄積なのであるが——農業資本の發展を基礎とする年生產物＝地代

22) Massie, An Essay on the Governing Causes of Natural Rate of Interest, 1750.
23) Hume, Political Discourses, 1752.
24) Hume's Essays, p. 220.
25) Turgot, Réflexions, § 49. 50.

の蓄積の上に立つものである。チュルゴーは年生産の概念によつて、社會的生産の見地に迄肉迫するが生産資本の分析に不充分な爲、その終りを全うし得ない。

商業資本が産業資本に從屬する副次的一資本にすぎぬものとするならば、農業資本はそれの構成に與る一資本にしかすぎない。利附貸付資本の形成、蓄積を商業資本乃至は農業資本の蓄積にかゝはらせて論ずる叙上の二つの見解は、産業資本の立場からそれ等の一面性が克服されねばならない。この克服を果したものは、いふ迄もなくスミス(註四)であつた、然かも、加るに、社會的再生産の見地から。

(註四) 尤もスミスと雖もチュルゴー同樣、資本の始源的蓄積を動産の蓄積として說きおこしてゐる。[26] 然し同じ出發點に發足し乍らも、展開される所論はチュルゴーと著しき逕庭がある。それは以上のべた如くである。

× × × ×

スミスは利附貸付資本の理論を、利子の理論を、産業資本と産業利潤との上に打立てた。然かも彼はこれらを單に個別的資本の見地からのみでなく、社會的見地からも考究する。そして貸付資本の形成、蓄積をも、これら二つの視點から論究する。かくて近代的利附貸付資本の理論は、そして近代的利子の理論は、たとひ荒削のものであるにせよ、スミスにおいて一つの巨匠的完成をつげてゐる。爾後の古典派諸學者の努力は、唯かゝる逞しい彫塑の單なる琢磨にしかすぎないであらう。

26) Smith, ibid., Vol. I, p. 258 Cf.Lewinski, ibid., p. 83.